

[成果情報名]未成熟ソラマメの一斉収穫後の採種法

[要約] 未成熟ソラマメの一斉収穫栽培法で、初回もしくは収穫開始1週目を一斉収穫とし、残りの莢を次作の種子用として利用しても、発芽率で問題はなく、種苗費の低減が可能である。

[キーワード] 未成熟ソラマメ、一斉収穫、採種体系

[担当] 農林技術開発センター・干拓営農研究部門

[連絡先] 電話0957-35-1272

[区分] 総合・営農(干拓)、野菜

[分類] 指導

[背景・ねらい]

未成熟ソラマメの大規模営農に対応した栽培法として、無整枝放任による一斉収穫法を確立した。(平成20年度、研究成果情報 [指導])その中で、生産費低減を目的とした自家採種体系について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 干拓地における未成熟ソラマメの一斉収穫栽培法では、10月下旬は種の作型で年次間差はあるものの、安定してほぼ2,000kg/10aの収量が確保できる。(表1)
2. 収穫開始1週目の初期収量は、全収量の70%以上であり、その後の残莢を青果用として収穫せず、次作に向けた採種用として残した場合、10a以上の種子量が確保できる。(表1、2)
3. 1回目の収穫後、残り莢を着莢状態のまま放置し、約2週間後に黒変した莢を収穫する。風乾後、莢のまま3℃の低温貯蔵庫で保存した種子を10月下旬と12月上旬には種した場合、発芽率は90%以上を示し、購入種子と差はない。(表3)

[成果の活用面、留意点]

1. 採種用として残す若莢は、約40kgで次作の10a以上の種子量が確保できる。
1回目の収穫後、坪刈り調査により2回目以降の収量を推定し、次作の種子量を確保できる面積を採種用として確保する。
2. 採種用として残す株は、ソラマメゾウムシ等の防除を行い、黒変した莢を収穫後、莢のまま天日乾燥した後、低温貯蔵庫で保存する。

[具体的データ]

表1 年次別の耕種概要と作柄

年次	は種	収穫	整枝本数	マルチ	窒素 施肥量	総収量 (kg/10a)	規格別収量・比率(下段:%)			収穫1週目 収量 (比率%)
							3粒莢 (kg/10a)	2粒莢 (kg/10a)	1粒莢 (kg/10a)	
17年	10/27	05/10 ~ 05/24	4本整枝	無	9.0	897	374 (41.7)	377 (42.0)	146 (16.3)	606 (67.5)
18年	10/18	05/11 ~ 05/31	放任	無	11.2	1,795	719 (40.1)	692 (38.6)	384 (21.4)	1,265 (70.5)
19年	10/19	05/02 ~ 05/23	放任	黒マルチ	10.0	2,784	1,193 (42.9)	1,061 (38.1)	507 (18.2)	2,077 (74.6)
20年	10/30	05/08 ~ 05/23	放任	黒マルチ	10.0	1,910	868 (45.4)	729 (38.2)	304 (15.9)	1,429 (74.8)
21年	10/30	05/11 ~ 05/18	放任	黒マルチ	10	2,040	1300 (63.7)	560 (27.4)	180 (8.8)	2,001 (98.1)

※年次は収穫年、品種「陵西一寸」、畦巾160cm 株間40cm 1,560株/10a

表2 採種向け収量

年次	2週目以降の		次年度 作付可能面積 (a)
	莢数 (莢/10a)	収量 (kg/10a)	
18年	30,888	530	229
19年	32,150	707	235
20年	23,322	481	212
21年	1,716	39	13

表3 発芽率調査

種子履歴	品種	(単位:%) は種日	
		10/30	12/01
購入種子	陵西一寸	97.2	92.0
	春陵西	100.0	87.7
自家採種	陵西一寸	92.8	92.5



図1 採種用として収穫したソラマメ (09/5/27)

[その他]

研究課題名：諫早湾干拓大規模環境保全型農業
技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：小林雅昭

発表論文等：なし